

2020年5月3日(日)

上尾合同教会

聖書 イザヤ書 55 章 1～3 節

ヨハネの黙示録 3 章 14～18 節

説教 「黙示録⑱—熱くも冷たくもないから」

武田真治牧師

この礼拝堂に、みんなで集まることが許されないで、それぞれのご家庭やお部屋で、個々に礼拝を捧げているという今の状況で、改めて思われることは、みんなを繋ぐのは、この説教、聖書の言葉なんだなあということです。この説教録音を、共に聴いているということで、私たちは繋がっているとやってよろしいのではないのでしょうか。先週も何人かの方から、「先生、説教の録音聴きました。」あるいは、「パソコンの前で礼拝しました。」とか、お伝えいただきました。中には、いつも礼拝の後に一言二言、説教のご感想をいただく方が、「先生と直接話ができないから。」とハガキの前と後ろ、表と裏に、びっしり説教の感想や想いを書いてくださって、送ってくださっていました。ありがとうございました。そして、皆さま、お元気でしょうか。お一人おひとりに、神さまのお守りとお支えとがさらに豊かに注がれますようにと、心からお祈りしております。

さて、ヨハネの黙示録を続けて学んでいます。7つの教会の手紙も、いよいよ最後の教会、ラオディキアの教会へと入って参ります。この7つの教会への手紙を読んでおられますと、改めて思いますことは、とても現実的だなということです。皆さま、そう思われませんか。

黙示録というと、どこか、架空の未来の話というイメージが強くて、書かれていることも現実離れをしているんじゃないかと、どこか思っているところがありますけれども、この7つの教会の手紙を読みますと、とても現実的だな、今でも通じる、今の教会にも本当にあるな、ということをお考えられます。それは、実はこのラオディキア教会、それぞれに現実に存在した教会だからなんですね。

このラオディキア教会も、他の聖書の箇所にも実は出てきます。コロサイの信徒への手紙第2章1節(新p369)読みます。「わたしが、あなたがたとラオディキアにいる人々のために、また、わたしとまだ直接顔を合わせたことのないすべての人のために、どれほど労苦して闘っているか、分かってほしい。」この<わたし>というのは、伝道者パウロですね。<あなたがた>というのは、コロサイの教会。そして、<ラオディキア教会の人々>のためにも、<わたし>はいろいろ祈ったり、考えたりしているんだよということを言っております。

実は、このコロサイとラオディキア、そして後から出てきますがヒエラポリス、この3つの町が非常に地理的に近かったんですね。リュカス川、リュカス溪谷、英語ではルーカス溪谷というところなんですから、その領域に点在している3つの町なんですね。でもとっても近くて、コロサイとラオディキアの距離は、直線で15kmくらいだったと言われています。上尾からだど、浦和とか川口あたりの距離です。そういう距離感ですね。

この3つの教会は、エパfrasという人物が開拓伝道したと言われていて、一緒にね。そのことも実はコロサイの信徒の手紙に出てきます。4章です。2ページめくっていただいて、373頁、コ

ロサイの信徒への手紙第 4 章 12 節から読みます。「あなたがたの一人、キリスト・イエスの僕エパフラスが、あなたがたによろしくと書いています。彼は、あなたがたが完全な者となり、神の御心をすべて確信しているようにと、いつもあなたがたのために熱心に祈っています。わたしは証言しますが、彼はあなたがたのため、またラオディキアとヒエラポリスの人々のために、非常に労苦しています。」多分、エパフラスが、このコロサイ・ラオディキア・ヒエラポリスを開拓伝道して、教会を建てた。そしてまた、他の場所に伝道しに行ったわけですね、パウロもそうであったように。だけど、今も熱心にコロサイの教会のために、祈ってるよ。また、ラオディキアやヒエラポリスの教会のためにも、非常に労苦したり、考えたり支援したりしているんだよと、言っているわけでありませう。それで 15 節。「ラオディキアの兄弟たち、および、ニンファと彼女の家にある教会の人々によろしく伝えてください。この手紙があなたがたのところで読まれたら、ラオディキアの教会でも読まれるように、取り計らってください。」まさに、兄弟付き合いたい、そういう風にやっている教会の感じが良く出ていますね。「また、ラオディキアから回って来る手紙を、あなたがたも読んでください。」ラオディキアでも読まれた手紙が、またコロサイでも読んで欲しいという風に、良い感じに出てきます。

ただ、17 節です。そのあと、「アルキポに、『主に結ばれた者としてゆだねられた務めに意を用い、それをよく果たすように』と伝えてください。」急に、<アルキポ>と説明もなく出てきますね。人の名前なんですけど、おそらくこれは、ラオディキアから回ってくる手紙をあなたがたも読んでください。アルキポに…ということから、この時ラオディキアの教会を牧会していた人物が、アルキポという人物ではないか。このアルキポという人物については、フィレモンへの手紙でパウロが<わたしの戦友>だと。だから、同じ伝道者なんですね。おそらく、ラオディキアの教会の、この時に責任を持っていた人物がアルキポなんです。

アルキポによろしく、ということだけでなく、こう言うんです。『主に結ばれた者としてゆだねられた務めに意を用い、それをよく果たすように』と、これは、アドバイスというよりは、ちょっと叱責といえますか、苦言を呈している感じですよ。ちゃんと働けよ。あなたは、牧師として委ねられた務めがあるのだから、それを果たせ！怠けるなよ！ということですよ。

多分、彼が怠けていたというよりは、どうもラオディキアの教会がうまくいってないということがあって、だけどアルキポに、諦めるな、がんばれという風に、言っているのではないかと考えられるところなんですね。じゃあ、何でラオディキアの教会というのはそれほど問題になったのか。それが、今日の箇所、さらに明らかになっていると言ってよろしいかと思えます。

ヨハネの黙示録に戻って、第 3 章 14 節～17 節。456 ページ。読みます。

「ラオディキアにある教会の天使にこう書き送れ。『アーメンである方、誠実で真実な証人、神に創造された万物の源である方が、次のように言われる。『わたしはあなたの行いを知っている。あなたは、冷たくもなく熱くもない。むしろ、冷たいか熱いか、どちらかであってほしい。熱くも冷たくもなく、なまぬるいので、わたしはあなたを口から吐き出そうとしている。』」

ああ、どこかで聞いたな。これは有名な言葉なんですね。「熱くも冷たくもなく、なまぬるいので、わたしはあなたを口から吐き出そうとしている。」何があったのか。17 節。「あなたは、『わたしは金持ちだ。満ち足りている。何一つ必要な物はない』と言っているが、自分が惨めな者、哀れな者、貧しい者、目の見えない者、裸の者であることが分かっていない。」

このラオディキアの人たちが言っている言葉、『わたしは金持ちだ。満ち足りている。何一つ必要な物はない』そう言っていること自体にむしろ私はびっくりする、驚かされるんですね。この背後に何があるかと申しますと、歴史的な状況がありまして、先ほどコロサイ・ヒエラポリス・ラオディキアというのは、3 つ仲の良い、お互いに発展してきた町。この 3 つの町とも、羊の毛織物の工業で発展してきた町。ところが、ローマ帝国がこの地域を支配するようになりますと、帝国の中で、自由に行き来することが出来るようになりますね。そうすると、商業・貿易がすごく盛んになるわけです。また盛んにさせて、そこからローマ帝国は利鞘といいますが、税金を取ることにになりましたから、結局、交通の便にとっても優れていた、いろんな街道が交じわっているラオディキアの町が、実は繁栄するようになるんです、この 3 つの中で。

例えば、この地域の繊維の工業を一手にラオディキアが取り仕切るようになります。そして、ここでは、黒紫という羊の毛が取れるそうで、それは非常に上等な羊毛なんですね。そして、それで服を作って、ローマ帝国全体に売る販路を開拓しまして、当時、ローマ帝国の中で、ラオディキアの洋服は最高級品の服として重宝された。すごくよく売れた。その銘柄になるほど、ブランドになるほど、ラオディキアは有名になった。この時代、なんとラオディキアには銀行もあったと。資料がありません。人にお金を貸せるほどの、お金持ちが、お金を儲ける者たちがそこには居たということですよ。

一方、そのコロサイの町の方は、ラオディキアが繁栄する一方、だんだん逆に衰退していったといわれています。その象徴的出来事が、以前のフィラデルフィアの教会でも紹介しましたが、この地域には良く地震があった。特に AD61 年に起こった地震がありました。その地域の十余りの町が、壊滅状態になっちゃったという、大きな地震だった。その中の一つがフィラデルフィアの町で、ローマ皇帝ベスパシアヌスが町を復興させようと、金銭的に援助した。フィラデルフィアの人々は、感謝を込めて彼の家族の名前をとって、フラビアと町の名前を替えて、わざわざあなたに捧げま

すという形で、町を復興させたと思ってきました。

このラオディキアの町は、実は自分たち、ローマ皇帝の援助を断って、何と自分たち住民だけでお金を出し合って、そして経済力にもものを言わせて、ラオディキアを復興したんです。それだけ、町に実力があつたし、そして町の住民たちの団結力・独立心というのも強かった。そして、AD61年地震があつたあとに、近代的な町として、しかも商業や貿易に非常に都合の良いような街づくりをしたことによって、さらに一層その町が発展していく。そのことは、後々、ラオディキアの町の住民たちのプライド、自尊心を高めた。自分たちは、このラオディキアに住んでいる住民なんだ。それが、ここに現れている言葉で『わたしは金持ちだ。満ち足りている。何一つ必要な物はない』まさに、ラオディキアの住民の自信、自尊心、プライドを現す言葉なんです。

そういう教会でありますから、おそらくその町の教会も人数や規模も大きくなったんだと言われています。商売や、あるいは仕事を求めて他の町々から入ってくる人たちが、このラオディキアに入ってきて人口が増えるわけですね。当然、教会の中にも他の町々から来て、今で言えば、転入会をして、その教会が大きくなる。経済的にも当然豊かになるわけで、町自体も私たちは本当に豊かだ。そういうプライド持って、ラオディキアの住民だといっているのと同じように、教会も自分たちは本当に立派な教会になった、豊かな教会になったと、独りで自立していける、そういう教会になったと。周りから見れば、何と羨ましい。時流に乗っている、世の流れに乗っているような豊かな教会だという風に見られていた。だけど、そのような表面的には立派で経済的にも自立して、たくさん信者が集まっているような大きな教会である、けれども、なんですよ。

17節「あなたは、『わたしは金持ちだ。満ち足りている。何一つ必要な物はない』と言っているが、自分が惨めな者、哀れな者、貧しい者、目の見えない者、裸の者であることが分かっていない。」分かっていない、気づいていないということが、目を眩まされているということですね。

なぜそうなのですか。本当の現実の状況、自分たちの状態が見えていない。なぜかということで、15節です。「わたしはあなたの行いを知っている。あなたは、冷たくもなく熱くもない。むしろ、冷たいか熱いか、どちらかであってほしい。熱くも冷たくもなく、なまぬるいので、わたしはあなたを口から吐き出そうとしている。」と。原因は、信仰がなまぬるいからだ、ということですね。＜なまぬるい＞から、はっきり自分たちの姿を見ていない。その＜なまぬるさ＞はどこから出てくるのか。金持ちだとか、満ち足りている、何一つ必要なものはない、本当に満ち足りている、充分だと思ってしまう。それが＜なまぬるさ＞に、＜なまぬるい信仰＞になっちゃっているだということです。

どうでしょうか。これは、イエスさま、何のことをおっしゃっているのか。少なくとも温度ですよ。

熱い、冷たい、そしてなまぬるい、というのですから。＜熱い信仰＞というのは、私たち分かるように思います。あの人の信仰は熱いな、熱心だなという意味ですね。本当に燃えてらっしゃるとか、良く言ったり致します。テレビでテニスプレーヤーの松岡修造とか出てきますね。「もっと熱くなれ!」とかです。そういう風に言ってますけれども。

イエスさまはここで、ラオディキアの教会の人たちに「もっと熱くなれ!何か、なまぬるいよ。もっと熱くなれ!」そういう風に言ってらっしゃるのか。冷めちゃってるといふ意味なのかもしれませんけれども、ちゃんと見なければいけないのは、「もっと熱くなれ!」ということ、そういう事ではないんです。そうではなくて、イエスさまは、熱いか、冷たいかのどちらかであって欲しいとおっしゃるんです。熱くも冷たくもないから、口から吐き出そうとしてらっしゃる。熱いことだけがいいとおっしゃってるわけではないですね。熱いのもいいんですけど、冷たくてもいいんだよと言うんです。

問題は、我々がここでちゃんと考えなければいけないのは、＜冷たい＞といわれる信仰って何か。あるいは、＜冷たい＞と言われるとはどういうことか。どうでしょうか。

ここが、解説者の多くはですね、説教者もそう書かれる場合が多いんですけども、信仰やキリスト教に対して冷淡、冷たい、そういう人だということですね。反発したり拒絶したり、クリスチャンなんて!教会なんてとおっしゃってる。そういう人のことではないか。そういう人たちは、長い目で見れば、反発をしている人がいろんなことに会って、逆にバーンと180度変わってクリスチャンになる、熱心になるという確率。そういう場合がとて多いから、熱いか冷たいかになれ!とおっしゃってるんだと。

確かに、私たちにも経験があると思います。全然鼻にもひっかかない、むしろ反発をしていたアンチ、キリスト教にアンチな人が、いろんな出来事や出会いを通して、逆に180度熱心なクリスチャンになられる。それを側で見ている、すごいなと思うことがあつたり致しますよね。そういうことを言っているんじゃないかと思えます。確かに、そうかも知れません。

けれどもただここでは、求道者に言われているわけではなくて、ラオディキアの教会員に対して言われているのであって、もしキリスト教に出会う前の人が、冷たい反発・反抗的だったのが、180度変わってクリスチャンになるんだという風なことであるならば、逆に言うと、「熱くなれ!」だけでいいわけです、言葉としては。かつては冷たかったけれども、「熱くなれ!」、だからあなたがたも「熱くなれ!」と言えればいいと思うんですね。ここではイエスさまは冷たいという事も良い、アリだよとおっしゃっているわけですよ。ですから、違う解釈・読み方では、この＜冷たい＞ということは、信仰において挫折している状態だ。求道者じゃないので、信仰者と考えれば、信仰において

挫折して息詰まっている状態のことをいうのだ。つまり、信仰が冷めている状態、冷まさせるような状態なんだという。なるほどなと思うんですけども、イエスさまはその方が良い。冷たい方もあっても良いっておっしゃってますので、つまり挫折している事が良いとなってしまうのではないかとと思うわけですね。ですからやっぱりここは、冷たいというのはむしろ我々が素直に、例えば教会の中で冷たいと感じるものは何かというと、例えば教会の中で全然相手にしてくれなかったり、これをしてくださいと言っても全然してくれない時に、「冷たいな」と我々言うじゃないですか。優しくしてくれない。教会が優しくしてくれない。ああ、冷たい教会だなと、そういう風に感じる事がありませんよね。そういう事ではないのか。

もうちょっと言うならば、はっきり罪を指摘されたい。あなたのここが問題だとか、はっきりそれはダメですと言われると、私たちは「冷たいな」と。それはしませんと言われると、「はあ」とね。ちょっと余談になるかもしれませんが、ウイルスの問題がこんなに厳しくなる前の段階で、教会の中で私たちは礼拝の中でマスクをしてください。あるいは集まって密の状態を作らないでくださいと言いだした時がありました。長老会で決めました。そうすると、ある人たちは「それはあまりにも冷たい。」とおっしゃる。教会はもっと温かさを感じるべきだ、冷たいことを言うなということなんでしょうね。確かにそうだと思いますけれども、でも、教会は、あるいは信仰は、冷たいと思われることを、敢えてそれに耐えなきゃいけなかったり、敢えてそのことをきっちり守らなければいけなかったり、しなければいけないということもあるんじゃないでしょうか。白黒はっきりつけたり、きっちり裁きをするという、むしろ冷たいか熱いかという場合のその冷たさというのは、教会が冷たいと思われるような態度ですね。私たちはどちらかと言うと、何でも赦してくれる教会は温かい、何でも私たちが受け入れてくれる、それが教会の温かさだと。ラオディキアの教会もたくさんの方が入ってきました。そして、どんな人でもどうぞどうぞ、と入ってきて、信仰や環境やいろんな問題が入ってくるわけですね。それぞれ違うかもしれない状況の中で、何でもいいよ、どうぞどうぞ、というその状態で教会はたくさん豊かになったかもしれないけれども、それを教会の温かさ和我々はどこかで考えているんですが、でもイエスさまはそれはどこかで<なまぬるさ>じゃないのかと。何でも許される、何でもあり。それはひっくり返すとわがままを聞いてくれる。厳しさのない、裁かれることのない、キシッとされることのない、その信仰ってなまぬるいんじゃないのかと。そうここで言われておられるのではないかと。

この<なまぬるい>と訳されているギリシャ語は、クリアポスという言葉です。このクリアポスという言葉は、クリオーという言葉から来ています。クリオーというのは、溶けるという言葉ですね。氷が

溶ける、だらしく緩んでいる状態なんです。だらしく緩んで。厳しいことや敢えて辛いことというのは、言わないでこのままでいいじゃないか。今が最高。こんなに立派、こんなに豊かなんだから、これでいいよ。そんなに気難しいこと言うなよ。どうでしょうか。

ヨハネの黙示録の解説・註解書など、特に外国圏の解説を読んでみると、ほとんど言っていないほど、例えばヨーロッパ・アメリカの解説者が良く声を揃えてというのが、このラオディキアの教会こそ現代の自分たちの教会そのものの姿だという風に、ほとんど口を揃えてそういっています。つまり、一方ではイエスさまとか教会、福音に対する熱情といいますが、信仰の熱さを持っていない。忘れてる。もっと問題なのは、そういう状態であることに対して、教会が危機感を本当に感じていない。ある程度豊かなんだ、ある程度教会が維持できているんだと。それはとっても熱心で一生懸命やろうとする人たちも居なければ、教会でもなければ、逆に、ああ何とかしなければならぬ、これは本当にひどい状態なんだ。厳しい状況なんだと。もしそう感じるなら、改革をしていかなければならぬ。これは改めていかなければいけない。ここをしっかりとやっつけていこうよ。という声が出てこなければいけないのに、そこもないんだ。ズルズル、ズルズルと今の現状を維持している。それが、アメリカあるいはヨーロッパの教会だと、それぞれの解説者が自ら自嘲気味に言ってるんですね。どうでしょうか。

私たちも、日本の教会もそうっていないか、ということも改めて思われますよね。17 節「自分が惨めな者、哀れな者、貧しい者、目の見えない者、裸の者であることが分かっていない。」そう言われているんですね。本当にちゃんと自分の状況を、ちゃんと見ていれば、今どうするべきか。今、ここはしっかりやらなきゃいけない、どうでもいいっていう風にね、何でもありだという風にしていて大丈夫かということが、ほんとうに見えているのか、ということなんでしょうね。どうでしょうか。

イエスさまが、私たちはどこかでなまぬるいこと、<なまぬるさ>我々でいうと教会の温かさですね。何でもあり、許される。まあまあ、ある程度この辺りがいいんじゃないか。むしろ私が思うのは、どこかでそれを良しとしている部分があるんじゃないか。私自身もそう思っているところがあるんですね。あまり白黒つけない、厳しいこと言わない。逆に、熱心になるのも行き過ぎていて、カルト宗教のように思われるんじゃないか。かといって、厳しいことを言う人や裁く人に対しては、嫌だと思って、まあまああなとところで、なまぬるい感じの教会が、現代の人には受けるんじゃないかと、どこかで私たち思っていないだろうか。そう私自身の反省としても、どこかで思っていないかと、私自身も教えられるんですね。イエスさまはそういう在り方に対して、ここではっきり、16 節「熱くも冷たくもなく、なまぬるいので、わたしはあなたを口から吐き出そうとしている。」この<口から吐き出す>

という言葉、もともとの吐き出すという言葉は、ギリシャ語のエメオーという言葉ですね。実はこれはとても強い言葉で、強い意味を持つ言葉で、『嫌悪感をもって拒絶する』、<吐き出す>そういう意味の言葉。口から吐き出す、嫌悪感をもって拒絶するんだ。飲み込むことができないから、もう、嫌だ。口から吐き出すという言葉なんですね。この口から吐き出すということは、ハッキリ言えば排除するという意味ですね。裁きを現します。イエスさまは、ハッキリおっしゃっています。それは受け入れられない。受け入れないよ。どうでしょうか。

私たちは、先ほど申しましたけれど、どこかで、私自身もね、言い訳のように言うんですよ。「私はまだ、生半可な人間です。」とか「私はこのような者でも牧師です。」とかですね。まだまだ未熟者です。とか、どこかでそう言ってるんです。そういいながら、それは言い訳をしているんですけども、「どうせ、自分が悪いんです。」そう言い訳をしているんですけども、それが、本当に心底愚かな人間だ、本当にどうしようもない人間だということから来ているんじゃないで、何か逃げているといいますか、まともに向き合っていないといいますか。どこか、この辺りの中途半端なところでなまぬるいんですよ。この中途半端なところで、まあまあにやっているのがいいんだ。どこかで、ちょうど宙ぶらりんの感じが一番いいんだと考えているところがあるんじゃないでしょうか。だから、言い訳するんですよ。どうせ愚か者です、とか、中途半端な人間です。そういう風に言い訳して、厳しい面を避けようと、そういう風にどっか私たちは考えている。それがいいんじゃないかと。

でも、イエスさまはここではっきりおっしゃっています。「なまぬるいのは、ダメだ。」それは、ダメなんだという事ですね。ダメだと言われなければいけないんだと思うんです。これはイエスさまがそうおっしゃってるんです。「あなたは、冷たくもなく熱くもない。むしろ、冷たいか熱いか、どちらかであってほしい。」と言う風に 15 節でおっしゃっています。これ、イエスさまがおっしゃってらっしゃるんです。そのイエスさまの前で私たちは、中途半端などっちつかずで、どっちでもいいじゃないですかと言えるか。言えない。イエスさまのこの言葉、「熱いか冷たいか、どちらかであってほしい。」本当にキッチリとした信仰を、しっかりと持って欲しい。あるいは、本当に熱心で信仰を熱く持っていて欲しい。中途半端でなく生きて欲しい。どうでしょうか。

イエスさま、今日の箇所 14 節最初のところで「ラオディキアにある教会の天使にこう書き送れ。『アーメンである方』』と出てきますね。この<アーメン>という言葉が固有名詞として使われているのは、この箇所のみです。この『アーメンである方』というのは、何でも赦してくれる方という意味ではありません。何でも OK 受け入れますよ、という意味ではなくて、その後にありますように「誠実で真実な証人」まさに、誠実で真実だ。誠で、誠実で、真実だ。本当の方、本物だ、<アーメ

ン>の方なんだと。誠実な方なんだという意味なんです。誠実であろうとすれば、どうしても熱いか冷たいか、どちらかにならざるを得ないということではないでしょうか。本当にそのことに対して、誠実であろうと思う時に、熱いか冷たいかにならざるを得ない。それはダメだ。本当に愛をもって、本当に厳しさををもって、それはやっちゃダメだと言わなきゃいけない時と、本当にじゃあ一緒に頑張ろうと熱くなって共にやるか、どっちかだろう。どっちもありです。わかりません。まだ私は無理です。この程度の者です。とか、言い訳をして、それに向き合えない、しっかりと生きれない。誠実でない場合、イエスさまは口から吐き出す。幸いなことと言いますか、まだ口から吐き出そうとしているっという言葉ですね。まだ吐き出してないんですね。口から吐き出そうとしている、その寸前だ。けどまだ吐き出してない。我々は吐き出されないためにも、やっぱりどこかで熱いか、あるいは厳しい信仰、どこかで向き合っていくもしっかりと真摯にあたる者でありたいと思います。せめて、中途半端な言い訳ばかりして生きていくような存在では、そんな信仰者にはならないでいきたいなど、そう改めて思われた聖書の箇所でした。

お祈りをいたします。

天の父なる御神様

私たちの中には、どこか、むしろなまぬるい方が良いと思っているような甘さがあります。

それは、自分への甘さでもあります。その方が楽だからであります。

白黒つけない方が、何となくこの世の中をうまく渡っていけるように思っているからであります。

憐れんでください。あなたは「それは誠実ではないだろう」と、そうおっしゃっておられます。

主よ、憐れんでください。情けない者ですから、主よ、その時々ちゃんと決断をしていける生き方ができますように。

言い訳ばかりをして、逃げる者ではなくて、その時々自分の責任として、ちゃんと信仰において決断をし、判断をして、そして、その結果を引き受けて生きて行けるような生き方をして行くことができますように。

「熱いか冷たいかであって欲しい。」と、その思いを受け止めていただけますように。

そして、あなたに本当に言い訳をしないで生きる生き方が少しでもできますように、導いてください。また、そのような教会でありますように。

この時を感謝しつつ、この祈り、イエスのみ名を通してお捧げ致します。 アーメン